

手つかずの部屋  
第三回Swanee River  
心の中の故郷を偲ぶ  
オールド・フォーク・ソング

矢原 徹一

東大小石川植物園に助手として就職して数年後、研究室づくりが少しめどが立ってきたので、海外調査に出かけようと考えた。当時、アジアでの海外調査に多くの研究者が取り組みはじめていたので、私はアジアを避けて、アメリカ大陸を調査地に選んだ。私が研究していたヒヨドリバナ属は、東アジアと北米東部に隔離分布しており、北米東部でも日本と同様に、無性生殖をする倍数が進化していることがわかってきた。そこで、北米東部のヒヨドリバナ属についての研究で学位論文を書いた、Victoria Sullivan という研究者と連絡をとり、南西ルイジアナ大学の彼女の研究室を訪問し、ルイジアナ州からフロリダ州まで一緒に調査に出かけることにした。

1985年当時、成田空港で出国すると、もはや日本語は通じなかった。まだ「地球の歩き方」シリーズが出版される前、インターネットもなかった時代の話である。空港のアナウンスの英語に必死で聞き耳をたて、「embarkation」（搭乗）という言葉がわからずに辞書で調べたことをよく記憶している。

の常識からすれば自由奔放で、とんでもなく失礼だった。救命胴衣のつけ方を説明する動作がみんなばらばらで、ウインクしたり手を振ったりする愛嬌には好感が持てた。しかし、サンフランシスコへの長いフライトで熟睡していた私の鼻先に、トンクスで挟んだウェットティッシュを押し付けて無理やり起こす「サービス」には閉口した。フライトは2時間遅れてサンフランシスコ空港に到着し、税関検査では「Your English is broken」と言うひとことで後回しにされ、乗り継ぎ時間が4時間あったにもかかわらず、ルイジアナ州ラファイエット行きのために乗り継げなかった。ノースウエスト航空のスタップとbroken Englishでかけあった結果、テキサス州ダラス空港に飛び、そこで一泊して、翌日のラファイエット行きのフライトに乗れることになった。フライト名と「This is a ticket. The company absorbs the difference」という指示を手書きで書いた紙に責任者が署名し、これを持ってカウンターに行けと言われ、ダラス行きの手続きカウンターに行ったら、本当に搭乗できた。

夜もふけた10時過ぎにダラス空港に到着し、ホテ

ルの予約カウンターを探しているうちに、通路の壁でホテル案内を見つけた。適当にホテルを選んで電話をするので、私もホテル名を言って乗車した。そのあと、乗客は空港近くのホテルで一人、また一人と降り、ついに私ひとりになった。その後タクシーが街灯のない真つ暗な道を走り続ける間、私はだまされているのではないかと、不安がつのつた。10分ほど経って、暗闇の中にホテルの明かりが見えたときには、本当に安堵した。翌朝、ホテルの周囲には、見渡す限りの荒野が広がっていた。再び空港に向かう間、タクシーは荒野の中を走り続けた。ラファイエットはルイジアナ州都ニュー・オーリンズから約200km西にある小都市である。ダラス空港からラファイエット空港への便は、American Eagle社の9人乗りの小型機で、低空を飛んだので、眼下の景色がよく見えた。ラファイエット空港は、屋久島空港と同規模だった。ここまでの田舎とは予想していなかった。

この苦難の旅の末にたどりついたルイジアナは、私にとつては合衆国内であこがれの地の一つだった。小学校5年生のころ、なぜかステイブン・フォスターの歌を好きになり、「おおスザンナ」、「草競馬」などをよく聴いた。その「おおスザンナ」で、次のように歌われている州、それがルイジアナだ。

わたしやアラバマからルイジアナへ

バンジョーを持って出掛けたところで

降るかと思えば日照り続き旅はつらいけど泣くの  
じゃない

おおスザンナ 泣くのじゃない

バンジョーを持って出掛けたところで

(津川圭一 訳詞)

この歌は、フォスターが22歳のとき(1848年)の作品だ。1848年にはカリフォルニアで金鉱が発見され、ゴールドラッシュの時代がはじまった。一攫千金を夢見て西部へと荒野を旅する人たちの間で「おお、ス

ザンナ」が愛唱され、この曲はまたたく間にアメリカ人の人々に知られることになった。

私はルイジアナへの苦難の旅の中で、「おおスザンナ泣くのじゃない」という歌詞を何度も口ずさんだ。しかし今回の記事を書く間に、実はこの訳詞は元の歌詞とは逆の意味だと知った。元の歌詞“*Oh! Susanna, oh don't you cry for me*”は、命令形ではなく、スザンナに懇願している文章だ。だから、「おおスザンナ 泣いておくれ」と訳すべきなのだ。

とはいえ、「おお、スザンナ」の軽快なメロディと、記憶に残るバンジョーの響きは、苦難の旅を続ける私の心を癒してくれた。ゴールドラッシュ時代に荒野を幌馬車で旅した当時の人たちに思いをはせながら、私はラフエイエット空港に降り立った。その空港もまた、地平線まで広がる荒野の中にあった。

南西ルイジアナ大学のVicky Sullivan博士は陽気な女性で、はるばる日本からやってきた若者を歓迎してくれた。彼女の友人と3人で、フロリダ州太平洋岸まで片道約1200キロのドライブに出かけた。メキシコ湾岸を

東西に走るインターステイト・ハイウェイ10号線沿線は、ただひたすら平坦な土地だ。森林は開拓時代に切り尽くされているので、沿線の風景には植物好きの私の注意を引くものはあまりなかった。ただし、ニュー・オリズでメキシコ湾にそそぐミシシッピ川はとても印象的だった。ゆったりと流れる川の水は、大陸河川らしく泥で濁っていた。大学院時代にタイで見たチャオプラヤ川を思い出した。川の大きさを目の当たりにして、ここは大陸なのだという実感が強まった。

途中で、フロリダ州で竜巻が起きて死者が出たというニュースが入った。竜巻が起きると自動車すら空に吸い上げられるのだという物騒な話を聞きながら、初めてアメリカの大地を走りつづけた。400kmほど運転してルイジアナ州を抜けると、その東のアラバマ州はすぐに通過して、目的地フロリダ州の西端に入った。フロリダ州は、北側のアラバマ州の領地をまるで横取りしたかのように、メキシコ湾岸に沿って西に長く伸びている。この約300kmに及ぶ延長部は、Pan Handle (フライパンの柄)と呼ばれている。フロリダ半島は南北に長い

ので、フライパンに例えるのは少し無理があると思うが、フロリダ州の西部を「柄」にたとえたくなる気持ちは、地図を見ると理解できる。

フロリダ州Pan Handleに入ると、少し地形に変化が出てくる。フロリダ州の最高標高が105mなので大した起伏ではないのだが、それでも起伏があるためにあちこちに森が残っている。アラバマ州との州境から約250km、州都タラハシーまで約50kmの場所に、Torreya 州立公園がある。アパラチコラ川沿いに小高い丘(最高標高90m)があり、世界でもこの地域にしかなく*Torreya taxifolia*というカヤ属の樹木が自生している。残念ながら*Torreya taxifolia*を見ることはできなかったが、アメリカブナ(*Fagus grandifolia*)の森を見て感激した。日本のブナは冷温帯落葉樹林の代表種で、九州では900m以上の高い山に行かないと生育していないが、ここフロリダでは鹿児島と同緯度の低地にアメリカブナが生えているのだ。

約800kmのドライブのあと、州都のタラハシーに宿泊し、翌日はさらに東をめざした。タラハシーから大

西洋岸のジャクソンビルまで、さらに約400kmの距離がある。フロリダ州の面積は17万km<sup>2</sup>。九州の実に4.6倍もある。北米大陸の大きさを実感させられる。

タラハシーからしばらく東に走ると、インターステイト・ハイウェイ10号線はスワニー河を横切った。ステイブ・フォスターの名曲で、いまはフロリダ州歌であるOld Folks at Home (故郷の人々) に歌われている川だ。この曲はSwanee River (スワニー河)とも呼ばれ、日本ではこの名前で広く親しまれている。

スワニー河の河岸に車を止めて、カシとマツの疎林内の明るい草地を探すと、目的のヒヨドリバナ属の植物が何種も生えていた。一通り採集を終えて、スワニー河の流れが見える場所まで行つて、驚いた。水が綺麗なのだ。また、河岸には岩があり、日本の渓流河川を思い出させる景観が目に見え込んだ。スワニー河沿いには石灰岩の露頭があり、この特徴ある地質がスワニー河の美しい景観を生み出している。ミシシッピ川などの大陸河川をいくつも見たあとだけに、北米大陸にもこんなに綺麗な川があることに、感銘を受けた。ステイブ・

フォスターの「スワニー河」の歌詞を口ずさみながら、ゆつくりと河岸を歩いた。

遥かなるスワニー河 岸辺に  
老いしわが父母 われを待てり  
果てしなき道をば さすろう  
身にはなお慕わし 里の家路  
さびしき旅を 重ねゆけば  
ただ懐かし遠き わが故郷  
(堀内敬三 訳詞)

シンコペーションの効いた「おおサザンナ」とは異なり、哀愁のあるメロディが胸に沁みる名曲だ。フォスターは、南部の綿花畑での奴隷労働から脱走に成功し、北部の自由州で暮らすアフリカ系の人たちが、南部の故郷を偲ぶ歌として「スワニー河」を作曲した。このとき、南部を流れる河の中から、彼の曲想と歌詞によく合う川として、スワニー河を選んだ。スワニー河の美しさを見ると、この選択は大正解だったと思う。ただし、フォス

ター自身はこのスワニー河を一度も訪れたことがなかったそうだ。

「おおサザンナ」や「スワニー河」などのフォスターの歌曲は、ミンストレルショーで歌われる曲として作られた。ミンストレルショーとは、顔を黒く塗った白人によつて演じられたショーのことだ。南北戦争以前のミンストレルショーは、アフリカ系アメリカ人を風刺する人種差別的なエンターテイメントだった。しかし一方でミンストレルショーは、アフリカ系の音楽が、ヨーロッパ系の音楽や合衆国建国以後のフォークソングと融合し、新しいアメリカ音楽を生み出す場ともなった。子供のころからミンストレルソングを歌って育ったフォスターは、アフリカ系の人たちをリスペクトし、「スワニー河」の歌詞に象徴されるように、彼らの視点に立った曲を作った。また、アフリカ由来の楽器であるバンジョーを多用し、アフリカ系の音楽のリズムを取り入れて、新しいアメリカ音楽を生み出した。フォスターの功績の評価は紆余曲折をたどったが、今では「アメリカ音楽の父」として讃えられている。

このようにアメリカ音楽の発展に大きく貢献し、いまなお歌い継がれる多くの名曲を残したフォスターだが、その人生はあまりにも短かった。経済的に困窮し、妻子にも去られたフォスターは、南北戦争(1861-65)の終結を見ることなく、1864年に37歳の若さでこの世を去った。

フォスターの生涯に思いを馳せつつ、私はフロリダ半島を横断し、ヒヨドリバナ属の採集をしながら、太平洋岸のジャクソンビルにたどりついた。綿花貿易が盛んだった南北戦争以前には港湾都市として栄え、合衆国への入国管理局が置かれていた場所だ。南北戦争中には北軍と南軍による争奪戦の舞台となった。今ではフロリダ州最大の都市に発展したジャクソンビルから南下し、スペイン統治時代に栄えた歴史のあるセント・オーガスティンで、大西洋に面した砂浜に出ることができた。セリ科チドメゲサ属の *Hydrocotyle bonariensis* が砂浜に点々と生え、小さな丸い葉を広げていた。この大西洋の向こうには、ヨーロッパ大陸があり、そしてアフリカ大陸がある。アフリカから奴隷として連れてこられた人た

ちは、この海をどんな思いで眺めていただろう。そんな  
思いを胸に、大西洋から静かに寄せてくる波を手ですく  
い、指先をなめてみた。塩辛くて、少し苦い、しかし懐  
かしい味がした。

※今回の記事を書くにあたり、以下のウェブサイト・文献を参照させていただいた。

アメリカ民謡の父 スティーブ・フォスター

<http://www.worldfolksong.com/foster/index.html>

おおスサンナ…誤訳で名曲も台無しだよ、スサンナ

<http://bbseinglishbbs.seesaa.net/article/433416139.html>

宮下和子：スティーブ・フォスター再発見

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-risc/ics/kiyou/pdf\\_26-1/Ritsill\\_CS\\_26\\_1pp.79-98MIVASHITA.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-risc/ics/kiyou/pdf_26-1/Ritsill_CS_26_1pp.79-98MIVASHITA.pdf)



矢原徹一 やはら てつかず

九州大学教授 持続可能な社会のための決断科学センター長

1954年福岡県生まれ。京都大学理学部卒。  
東京大学助手、助教授を経て1994年より九州大学教授。  
専門は生態学・進化学。著書に『花の性』『保全生態学入門』（共著）ほか。

## 編集後記

「まちづくりがしたい！」と受験した前期試験で第一  
志望の大学に落ちてから早十年。あの頃の私はまさか十  
年後に歯医者になりながら地域おこし・まちづくりに関  
わらせていただけるとは想像だにしていませんでした。  
目標を管楽器科学の研究者に切り替えた後期試験で本学  
の歯学部拾っていただき、その後はいつの間にかまち  
づくりのことなどすっかり忘れて大学生活を謳歌してい  
ました。国家試験を無事クリアし、研修医を終えて入っ  
た口腔画像情報科学（歯科放射線学）の大学院で、念願  
の管楽器科学の研究を始めた頃に決断科学プログラムと

出会いました。専門を活かすなら当然健康モジュールだ  
とは思ったのですが、統治モジュールの説明を聞いてい  
るうちにまちづくりに興味を持つていたことを思い出  
し、あの頃の思いを果たすべく未知の分野に飛び込んで  
みたのでした。

まちづくりの現場での「決断」はまさに多種多様。トッ  
プダウンで首長がどんと決めてしまうものもあれば、関  
与者が話し合いに話し合いを重ねてじっくりと決めてい  
くこともあります。本特集では、そうしたまちづくりの  
現場での泥臭い決断に多数直面した私達統治モジュール

## 古橋 寛子

歯科放射線学